

# 丸屋商社之記

丸屋商社は、吾社創業時の商號なるが、明治十二年に之を丸善商社と改稱し、更に明治二十六年商法の制定と共に現在の名稱に改め、翌二十七年登記を了す。

丸屋商社の記は、明治二年正月創業に當りて制定せられたるものにて、創業の精神並に經營の根本義を説きたるものなるが、同六年十月其の末尾に童蒙教草の一節を添え、更に丸屋商社々則十二則を附して上刻す。これ丸屋商社之記刊行の嚆矢なり。翌七年五月丸屋商社死亡請合規則成りたるを以て之を追加して一冊に纏め明治八年再び上刻す。その後明治十年二月丸屋商社々則及び死亡請合規則を改正するに及び三度丸屋商社之記を印刷せり。越えて明治四十四年十月、吾社の創立者早矢任有的氏の追悼會を催すに當り、明治八年版の丸屋商社の記より社員名簿を除きたるものを印刷に附し、記念として關係者の間に頒布せるは、第四回目の刊行にして概ね原本の體裁に依る。今回の印刷亦右に倣へるものにして第五回目の上梓なり。

昭和十六年五月

丸善株式會社

丸屋商社之記

凡ソ事ヲ爲スニハ先ヅ自カラ其身分ノ地位ヲ考ヘザル可ラズ  
今我輩ノ地位ヲ考フルニ官ニ在テ政ヲ爲スノ責アルニ非ズ亦  
奴隸ト爲テ他人ニ仕ルノ務アルニ非ズ不羈自由我欲スル所ヲ  
爲ス可キ日本人ナリ既ニ日本人ノ名アレバ亦其日本人タル身  
分ヲ考ヘ日本全國ノ繁盛ヲ謀リ同國人ノ幸福ヲ助ケ成サザル  
可ラズ

昔鎖國ノ世ニ在テハ人皆自國ノ有様ニ満足シテ更ニ步ヲ進ル  
ノ志アル者ナク却テ自負驕慢ノ弊ニ陥リ或ハ此國ヲ武ノ國ト  
稱シ或ハ義ノ國ト唱ヘ或ハ萬國至尊ノ神州ト云フ者アリ或ハ  
百需全備ノ富國ト云フ者アリテ自國ヲ尊崇スル其實ニ過ギ  
徒ニ虛名ヲ設テ獨リ自カラ悦ビシナレバ今日外交ノ盛ナル  
ニ當テハ其虛名ヲ棄テ、實ヲ求メザル可ラズ竊ニ此國勢ヲ察

スルニ近來我海陸ノ軍制一面目ヲ改メタリト雖凡未ダ彼ノ國  
ノ盛ナルニ及バザルハ明ニ人ノ知ル所ナレバ獨リ我國ノミヲ  
以テ武國ト稱ス可ラズ世界萬國義理ヲ棄テ、國ヲ建ルモノア  
ルヲ聞ズ西洋諸國既ニ建國ノ名實アレバ悉皆不義ノ國ニ非ザ  
ル明白ナリ然バ則チ獨リ我國ノミヲ以テ義國ト云フノ理ナ  
シ西洋諸國各獨立ノ一政府ニテ比肩併立互ニ其國威ヲ持張ス  
ルモノナレバ獨リ我國ノミヲ以テ至尊ノ神州ト唱フ可ラズ天  
然ノ物人工ノ品萬國各其類ヲ同フセザレバ獨リ我國ノミヲ以  
テ全備ノ富國ト云フ可ラザルナリ虚心平氣以テ世界ノ景況ヲ  
問ビ其文明ノ前後ヲ察スレバ我日本國ハ數千百年鎖國ノ睡眠  
中ニ西洋ノ諸國ヲシテ恰モ先鞭ヲ著ケシメタルモノニテ我國  
コソ却テ彼國ノ有様ニ及バザル可シ是即チ我輩ノ常ニ患ル所  
ニテ其所患ノ原因ハ先人數百年ノ安眠中ニ釀シ成シタル遺傳

ノ國毒ナリ今コノ毒ヲ一掃シテ彼ノ文明ノ域ニ入り共ニ進歩  
ヲ争ハントスルニハ其事固ヨリ多ク其業固ヨリ難シ文學研カ  
ザル可ラズ武備修メザル可ラズ百工技藝一モ等閑ニス可キモ  
ノナシト雖凡就中至重至大コレヲ等閑ニシテ禍ヲ致スノ速ナ  
ルモノハ商賣ノ一事ナリ抑モ外國人ノ我國ニ來ルハ唯和親ノ  
タメニ非ズ其實ハ貿易ヲ行ハンガタメナリ現今外人ノ我國人  
ニ接スル趣ヲ見ルニ文學ヲ傳ル者アリ技術工藝ヲ教ル者アリ  
法ヲ講スル者アリ武ヲ演ズル者アリト雖凡是等ハ皆外國交際  
ノ技末ニテ彼ノ大眼目ハ唯貿易ニ由テ利益ヲ求ルノ一事ニ在  
ルト固ヨリ論ヲ俟タズ然ルニ今コノ貿易商賣ノ權ヲ外人ニ占  
ラレ坐シテコレヲ傍觀スルハ日本人タル我輩ノ義務ニ背クト  
云フ可シ一度ビ貿易ノ權ヲ失ヒ彼ニ致サレ彼ニ依頼シ彼ノ元  
金ヲ借り彼ノ社中ニ役セラレ或ハ我社中ニ彼ノ國人ヲ招キコ

二  
丸  
善

レヲ尊ビコレヲ仰ギ其指令ノ下ニ奔走スル等ノ勢ニ陥ルトア  
ラバ國ノ災害コレヨリ大ナルハナシ斯ノ如キハ則チ國其國ニ  
非ズト云フモ可ナリ國其國ニ非ザレバ文學技術モ用ヲ爲スニ  
處ナカル可シ是即チ我輩ノ所見ニテ商賣ヲ至重至大ノ急務ト  
爲シ彼ノ文學技藝ハ先ヅ他ノ學者ニ任ジ政治ノ事務ハ在官ノ  
人物ニ讓リテ我身ハ專ラ商賣ニ從事シ日本國ノ商法ヲシテ獨  
立ノ地位ヲ得セシメ同國ノ人ヲシテ其幸福ヲ失ハシメズ以テ  
我輩ノ身分ニ恥ルトナカラント企望スル所以ナリ  
何等ノ職業ヲ問ハズ執行煉熟ナクシテ成シ得ベキモノアラス  
然ルニ今吾輩社ヲ結ビテ商賣ヲ營マントスルニ當リ嘗テ學ビ  
シトモナク又馴レタル事モナシ之ヲ學バンニモ世間商賣學校  
ノ設アルヲ聞カズ又帳合ノ仕方ヲ教ル人サヘモナキヲ如何セ  
ン依テ謂ラク吾社中ノ人僅ニ英書ノ表題ヲ解スルモノアリ又

藥品ノ名稱ヲ知ルモノアレバ此類ノ品ヲ以テ業トナシ吾會社  
ヲ以テ商賣學校ト見做シ吾徒實際執行ノ道場トシテ歲月務メ  
テ止マズンバ漸チ追テ商賣ノ道ヲモ學ビ得ルノ時アラント是  
即商賣ニ附テハ無學文盲ナル吾輩ノ斷然意ヲ決シテ事ニコ、  
ニ從フ所以ニシテ敢テ一時ノ盛業ヲ企望スルニハ非ザルナリ  
凡ソ人ノ生業ハ世間ノ不足不自由ヲ達シ吾不足不自由ヲ満足  
セントスルノ外ナラズ他ノ不自由ヲ達スルノ大ナルモノハ吾  
幸福ヲ得ルモ亦從テ大ナリサレバイカナル生業ヲナサバ吾徒  
ノ力能ク他ノ使用ヲナシ得ベキヤヲ議セザルベカラズ願フニ  
近來世間開化ノ端ヲ啓キ諸藝術モ亦進歩ヲハジメ人間幸福ヲ  
増スノ時ニ向ヘリサレバ未ダ何事モ備ワラザルモノ多ク特ニ  
人世ノ急務タル教育ノ職濟生ノ業ノ如キモ或ハ洋籍ニ乏シク  
或ハ藥品醫用器機ニ乏シク不自由少ナカラズト云ベシ故ニ吾

社先此品類ヲ賣買スルヲ以テ專業トナサントス  
人間ノ業務ハ盛衰常ナシト雖凡其盛衰ヲナスノ原ハ事物ニ處  
スル正理ニ依ルト之ニ悖ルトノ際ニアルベシ故ニ一人事ヲ  
獨裁スル片ハ或ハ誤テ正當ヲ失スルモ他ヨリ之ヲ批判裁正シ  
難シ是レ危害ノ由テ生ズル所ナリ同志社ヲ結ビ相互ニ輔ケ相  
互ニ正シ以テ正理ニ悖ラザルヲ求メバ自ラ轉覆ノ患ヲ防グニ  
足ルベシ今同志數輩ト諮リ或ハ元金ヲ出シ或ハ其身ヲ容レテ  
一商店ヲ開キ丸屋商社ト名ク其元金ヲ出ス人ヲ元金社中ト名  
ケ其身ヲ容ル、人ヲ勸社中ト名ク

勸社中ノ心得

吾勸社中ハ商賣ニ煉熟スル人モナク用ユル所ノ元金モ甚ダ多  
キニ非ザレバ世上有力ノ人ト例ヲ同フセバ轉覆從テ來ルテ必  
セリ故ニ勉メテ儉節ヲ守リ正實ニ業ヲ營ミ信以テ天ノ輔ヲ招

キ儉以テ經濟ヲ護リ偏ニ會社ノ長久堅實ヲ企望シ各人互ニ相扶ケテ後來ノ幸福ヲ希フベシ合衆國貨幣ノ銘ニ曰ク合スレバ即チ立チ散<sup>ワカ</sup>レバ即チ斃<sup>ユ</sup>ルトセバ<sup>レ</sup>ナイテ<sup>ツ</sup>ット<sup>ト</sup> ウキ<sup>キ</sup> フオ<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>又西洋ノ古語ニ曰ク徐々ニ急グ可シト<sup>メ</sup>ロー<sup>キ</sup>リー<sup>ハ</sup>スト<sup>ト</sup> 何レモ商業ニ就テノ戒ニハ非レ<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>勸<sup>レ</sup>社中ノ人此語ヲ以テ意トセバ轉覆ノ懼レナキニ近カラシ又或ル老人ノ咄シニ世間ノ商家一廻ノ商ヒニ萬金ヲ得ルモノハ屢々アレ<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>十年ニシテ數萬金ヲ殘ス人ハ稀ナリト商人ノ目ヲツクベキ所ナルベシ

損失アル時ノ心得

大概商業ニ危害ヲ帶ザルモノナシ故ニ永年ノ間ニハ災害モ過失モアルモノト思フベク常ニ其心得ナクテハナラヌモノナリ若シ不幸ニシテ災害ニ逢フモ又商賣上ニ損失アリ<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>急<sup>ニ</sup>之ヲ復セント思フ<sup>レ</sup>勿<sup>レ</sup>又徒<sup>ラ</sup>ニ之ヲ悔<sup>ユ</sup>ベカラズ其損ヲナシタ

ル所以ノ原由ヲ顧ミ以テ後來ノ戒メトセバ却テ安全ノ基<sup>凡</sup>ナリ何時トナク回復ノ出來ルモノナリ左スレバ數年ニ一回宛ノ損アリ<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>轉覆ニハ至ラザルナリ若シ大ニ其損ヲ悔ヒ偏ニ之ヲ復セント謀ル片ハ多クハ又初ニ損ヲ爲シタルト同ジ原由ニテ齊シク損毛ヲ重ヌルモノナリ余世間大商ノ轉覆ヲ見ルニ多クハ初ノ損ハ少ナクシテ身代ヲ傾クル程ニハアラザルモ急ニ其損ヲ復セン<sup>レ</sup>ヲ企テ二度目三度目ノ損ニテ破滅スルモノナリ故ニ商人ハ一旦ノ利ニ誇ル<sup>レ</sup>ナク一旦ノ損ニ驚ク<sup>レ</sup>ナカレ唯恐レ慎ムベキハ日々月々輕々ノ損ナリ只希ヒ望ムベキハ連綿不斷輕々ノ利ナリ一旦ノ損ハ連綿輕々ノ利ヲ以テ救フベケレ<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>連綿輕々ノ損ハ一時ノ利ヲ以テ補ヒ難シ

意外ニ利益アリシ時ノ心得

凡ソ人ハ戒慎ヨリ幸福ヲ得油斷ヨリ災害ヲ生ズルモノナレバ

善キモ惡シキモ常ニ異ル<sub>レ</sub>アレバ倍々謹慎ヲ加エテ注意スベ  
キナリタトヘバ若シ今吾商賣品輸入ノ欠乏スル歟或ハ入用ノ  
俄ニ増ス<sub>レ</sub>アリテ利益常度ヲ超ユル<sub>レ</sub>アル<sub>レ</sub>ハ必ズ又從テ輸  
入度ヲ超ヘ同商賣齊シク利益ヲ得難キニ至ル此時ニ當リ預メ  
其覺悟ナキ人ハ産ヲ破ル<sub>レ</sub>アリ

明治二己巳年正月

此冊子ヲ上木スルニ臨ミ童蒙教草ノ一章ヲ抄寫シ板主ニ請  
フテ茲ニ追加ス

「フランキリン」ノ遺文ニ云ク富ヲ得ル道ノ易ク平ナルハ市ニ行  
ク道ノ如シ唯二言ヲ以テ之ヲ盡セリ勤ト儉約トナリ時ヲ費ス  
勿レ金ヲ費ス勿レ此二ツノ者ヲ巧ニ用ベシ勤ト儉約トヲ棄レ  
バ成ルベキ<sub>レ</sub>ナシ此二ツノ者ヲ守レバ成ラザル<sub>レ</sub>ナシ少年ノ  
男子既ニ勤キテ且儉約ナラバ此ノ外ニ富ヲ助成スモノハ綿密

ト正直ノ二箇條ナリ勉強ハ恰モ幸福ヲ生ム母ノ如シ天ハ萬物  
ヲ人ニ與ヘズシテ勤キニ與フル者ナリ今日ト云フ其今日ノ内  
ニ勤ク可シ明日ノ故障ハ測ルベカラズ汝モシ人ノ家來トナリ  
テ其主人ヨリナマケ者トテ叱ラレナバコレニ赤面セザルヤサ  
レバ今汝ハ人ノ家來ニアラズシテ自身ノ主人ナリ自カラ其懈  
ルヲ咎テ自カラコレニ赤面セザル可カラズ

明治六癸酉年十月

丸屋商社々則

第一則

入社元金ハ百圓ヲ一口ト定メ一口或ハ數口ヲ一人ニテ出ス  
隨意ナリ

元金社中出ス所ノ元金總高ハ働社中出ス所ノ元金總高二比較  
シテ定限ヲ定ムルヲ左ノ如シ

働社中 出金 五千 壹万 二万 三万 四万 五万 六万

元金社 中出金 五千 一万五千 四万 七万五千 十二万 十七万五千 二十四万

年々諸種積金ノ高ヲ増シ危害ヲ減ズルガ故ニ年ヲ追テ兩社元  
金ノ比較ニ差等アルナリ

元金社中ノ出金ハ右ノ割合ヲ超ユベカラズト雖凡之ヲ減ズル  
ハ妨ナシ又此比例ニ充タズト雖凡商業ノ景況ニ從テ元金ノ多  
キヲ好マザル片ハ新入社ヲ辭スルハ働社中ノ隨意タルベシ

第二則 定約利益配分利益ノ事

會社ニテ一箇年間ニ得ル所ノ利益ヲ以テ第一ニ總元金高一割  
五分ニ當ルノ利ヲ元金ニ配當シ之ヲ元金定約利益ト名ク第二  
ニ同ジ金高ヲ以テ働社中總人部ニ配當シ之ヲ働社中定約利益  
ト名ク其餘ヲ配分利益ト名ケ之ヲ年々兩社中ニ配分スルヲ第  
五則ノ如シ

右ノ元金定約利益ハ年々之ヲ元金高二加ヘテ全五箇年ニシテ  
元金倍高トナシ出金主ニ返スベシ

右ノ如ク五箇年ヲ一期ト定メ第一期五箇年間 巳午未 二預ルモ  
ノハ第二期五箇年間 戌亥子 二返シ一期毎ニ舊ヲ改メテ新トナ  
ス其例左ノ如シ

巳午未申酉ノ三月朔日入社スル人ニ  
戌亥子丑寅ノ三月倍高トナシ返ス

元金社中五箇年ニ至リテ請取ヲ好マザル人ハ舊證券ヲ返シ

倍高ノ新證券ヲ得テ新ニ入社スルヲ隨意タリ

右ノ如ク年々舊一箇年分ヲ返シ新一箇年分ヲ預ル片ハ會社ノ元金年々平均ヲ得テ一時ニ大ナル増減ヲ生ズルヲナシ

五箇年間百圓ヅ、出セル元金社中ハ五箇年目ヨリ二百圓ヅ、ヲ得ルナリ其百圓ヲ取り残り百圓ヲ次第ニ翌年ノ入社金トナス片ハ永久年々百圓ヅ、ヲ得ヘシ

年々百圓ヅ、出セル元金社中五箇年ニシテ定約利益ヲ合セタル高左ノ如シ

二百圓 五箇年前百圓 百七十三圓七十五錢 四箇年前百圓 百五十壹圓五十錢 三年前百圓 百三十二圓二十五錢 昨年百圓 百十五圓 當春百圓 七百七十二圓五十錢

元金社中若シ入社初年ヨリ年々百圓ヅ、ヲ得ント欲セバ初メニ六百七拾二圓五十錢ヲ出ス片ハ其年ヨリ年々二百圓ヲ得ヘ

シ其百圓ヲ取り残り百圓ヲ次第ニ翌年ノ入社金トナス片ハ永久年々百圓宛ヲ得ルヲ年々百圓宛五箇年間出セル人ニ同ジ

第三則 元金社中中途脱社ノ事

元金ハ五箇年ニシテ倍高トナシ返スト定ムレバ中途ニシテ脱社スルハ隨意ナレ片得ル所ノ利益ヲ減ズルヲ左ノ如シ

元金高平均年一割ノ利ヲ添ヘ取り去ルヘシ已ニ年々ノ配分利益ヲ得タル人ハ之ヲ合シテ年一割ノ利ニ充ツルノミ又利ニ加エタル利ヲ得ヘカラズ其證券ヲ他人ニ讓ルハ隨意タルヘシ若シ然ル片ハ讓リ受タル人ノ姓名居所ヲ認メ證券書キ替ヘ手數料一口ニ附キ五十錢ヲ添ヘテ本局ニ投ズヘシ

第四則

働社中出ス所ノ元金ハ元金社中ノ出金ニ比較スルモノナレバ中途ニシテ隨意ニ脱社スルヲ許サズ但シ元金比較ノ高二差支



ナク働社中ノ衆議ニテモ許ス所ナラバ元金社中ノ例ニ異ナル  
 一ナシ

第五則

會社ノ安全長久ヲ保ツハ全社協合ノ力ニ由ト雖凡商業ノ盛衰  
 危害ノ増減ハ働社中ノ勤勉ト怠慢ニ關スルモノナレバ會社ノ  
 災害過失等ニテ損耗アルルハ其責メ働社中ニアリ故ニ利益少  
 ナキモ定約利益ヲ頒ツニ足ルルハ兩社利益ヲ頒ツ一甲乙ナシ  
 ト雖凡利益尙少ナキハ働社中ノ配分利益ヲ減ズベシ尙利益  
 少ナキハ細流社ニ積置ク所ノ備金ヲ以テ之ヲ償ヒ元金社中  
 ノ定約利益ヲ減ズ可ラズ萬一其損饒多ニシテ細流社積金ヲ出  
 シ盡シテモ尙足ラザルハ働社中ノ出金ヲ以テ之ヲ償ヒ元金  
 社中ノ元金ニハ損耗ヲ及ボスベカラズ但シ働社中ノ元金ヲ減  
 ズルノ場合ニ至リテハ元金社中モ其年ノ利益ヲ得ベカラズ

右ノ如ク働社中ハ自己ノ出金ヲ以テ元金社中ノ出金ヲ請合フ  
 モノナレバ利益多クシテ兩社中ノ定約利益ヲ頒カチテ尙餘ル  
 所ノ配分利益ハ之ヲ三分シテ其一分ヲ元金社中ニ配分シ二分  
 ヲ働社中總人部ニ配分スベシ

年々利益ノ増減ニ從テ兩社中利益分配ノ差等アル一左ノ如シ  
 元金 利益 定約利益 配分利益

一万圓	千五百圓	働社中	千五百圓	ナシ
一万圓	二千圓	働社中	千五百圓	ナシ
一万圓	三千圓	働社中	千五百圓	ナシ
一万圓	四千圓	働社中	千五百圓	三百三十三圓餘 六百六十六圓餘

兩社中定約利益ヲ年一割五分ト定ムルモノハ現今會社ノ借金  
 貸金ノ利足ヲ平均シ之ヲ當時世間普通ノ利足ニ比較シテ定ム  
 ルモノナレバ後來世上一般ニ利足ノ降下スル一アラバ其時勢

ニ隨テ減ズルコトアルベシ若シ然ルコトアルハ前以テ社中ニ報告スベシ其時脫社ヲ欲スル人ハ中途ト雖モ期ニ充チテ脫社スルノ例ニ同ジ

### 第六則 積金ノ事

全社保續金各店ヨリ月々積金ヲ出シ之ヲ細流社ニ預ケ置キ商業上損毛ノ備金トス

横濱書店 全藥店 全調合局 全唐物店

東京書店 全藥店 全唐物店 全仕立局

大阪店 西京店 各月々六圓 合六十圓

家作積金 地所家作ヨリ取立タル店賃地代等ニテ諸雜費ヲ仕拂ヒタル殘リノ半バヲ勘定場ノ利益ニ加ヘ其半バヲ家作積金トナシテ火災其外朽廢シテ建替ヘヲ要スルルキノ備トス

海陸難事備金 東京へ送品ハ百分ノ一半西京大阪送り品ハ百

九

丸 善

分ノ三ヲ取りテ其内ニテ運送ノ費用ヲ拂ヒ其餘ヲ積貯ヘ海陸ノ難事ニ備フ

貸金損耗備金 本局勘定場ニテ貸金ノ利十分ノ一ヲ月々取除ケ之ヲ積貯ヘ貸金ノ危害ニ備フ又預リ質物ノ流レ荷物ヲ賣拂ヒ元利差引テ利益アレバ亦此積金ニ加フベシ

無名備金 不用道具賣拂代金並ニ人頭稅働社中奉公人ヨリ出シタル過代金等ヲ積貯ヘ諸種備金ノ不足ヲ補フベシ  
以上五種積金ハ他人へ請合料ライオンシユヲ拂ヒ捨タルト同理ナレバ他ノ費用ニ充ツベカラズ

### 第七則 社中所有物ノ事

積金其外雜用ニテ買タル道具類等ハ全社利益ノ殘余ニシテ齊シク全社中ノ所有物ナレモ兩社中共若シ脫社スル人ハ其所分ヲ有スルヲ得ズ

第八則

社長十口以上入社ノ人ニシテ一ヶ年以上社中ニアル人ニ非社長十口以上入社ノ人ニシテ一ヶ年以上社中ニアル人ニ非但假社長ハ此限リニ非ズ  
全社内外ノ事務ヲ總括シ各店役割ノ當否ヲ察シ全社從前ノ成績後來ノ安危ニ注意シ諸事ヲ指令シ奉公人ヲ進退シ評議入札ノ問題ヲ出ス等專執權アルベシ但シ專任ノ役ヲ置タル各科ニ就テノ一ハ臨時止ムヲ得ザルノ片ニ非レバ獨裁スベカラズ即チ商賣上ノ一ハ各店支配人金銀貸借ノ一ハ金銀方全社中ニ關係スル一ハ取扱人ニ議シテ事ヲ決スベシ  
取扱人十口以上入社ノ人ニシテ一ヶ年以上社中ニアル人ニ非レバ取扱人タルヲ得ズ  
社中ノ便宜ヲ謀リ諸評議ノ一ヲ掌リ總テ社長受持ノ事務ヲ輔佐スベシ又社外或ハ政府ニ關スル一ヲ取扱フ役目ナリ  
書記方五口以上入社ノ人タルベシ  
本局ノ帳面ヲ總括シ諸店帳合ノ精粗ヲ檢シ全社成績表ヲ造ル

等專ラ其任トス

金銀方五口以上入社ノ人ニ非レバ金銀方タルヲ得ズ  
金銀借貸爲替及諸會計ヲ總括シ諸入費ノ辨給ヲ掌ドル  
各店支配人二口以上入社ノ人ニ非レバ支配人タルヲ得ズ  
其預リ店ヲ支配シ商業ヲ取扱フニハ專執ノ權アレバ金銀借貸商賣柄變化住地家作賣買轉宅人員ノ増減其店限リ雇入レノ人ハ此例ニ非ズ等ハ獨裁ヲ得ズ

第九則

諸店賣場ニテハ商業ノ元金ヲ預リ商賣ヲ營ミ月々元金ノ利足家作代金ノ利足並ニ月々ノ利益ヲ勘定場ニ送り若シ損毛アル月ハ其損分ヲ勘定場ヨリ請取ルベシ故ニ賣場ニテハ始終身代ニ増減ナシトス

第十則

勘定場ニテハ月々各店ヨリ送ル處ノ元金利息ヲ請取り月々其  
總高ノ内ヨリ入社金高ノ利息ニ當ル高ヲ現益口ニ記シ其余ヲ  
金利息ニ記スベシ又賣場ニテ損毛アル月ハ其損分ヲ現益口ヨ  
リ出シ勘定期ニ至リテ現益總高ヲ元金總高ト働社中總人部ニ  
比較シテ法ノ如ク分配スベシ

第十一則

元金社中ハ其出金ノ多少ニ拘ワラズ働社中ハ其持役ノ輕重ニ  
拘ワラズ前件諸則中不便利ト思フコトアラバ會局ニ云送リテ論  
駁スルノ權アルベシ又以上定ムル所ト雖凡實際不都合ノ廉ア  
ラバ臨時改正スルコトモアルベシ

第十二則

働社中並雇人共ニ毎夕勤怠録ニ其日ノ勤怠ヲ認ムベシ家ニ在  
リテ勤ムルモノハ(勤)印ヲ押シ社用ニテ他行スルモノハ(外)印ヲ

押シ輕疾ニテ社局ニアルモノハ(病)印ヲ押シ私用ニテ他出スル  
モノト私宅ニテ病ヲ養フモノトハ印ヲ省キ其印數ヲ算エテ年  
中勤メタル總日數トナス  
社長並ニ取扱人ハ社局ニ來ラザルモ私宅ニアリテ社用ヲ爲ス  
片ハ勤タル日數ニ加フベシ  
働社中外出入用ハ其仕拂ヲ記シテ勘定場ニ出シ社中費用ニ屬  
スルモノハ之ヲ償ヒ其私費ニ屬スベキモノハ之ヲ償フヲ得ズ  
東京往復ノ瀛車ハ下等ヲ例トス只貴客ヲ送迎スルコトアル片ハ  
此例ニ非ズ  
社中用ユル所ノ帳合ノ仕方ハ社中記帳法ニ記スルヲ以テ茲ニ  
略ス

## 丸屋商社死亡請合規則

當社ニ入テ商賣ヲ勉ル者ハ人々ノ働ニ從ヒ配分ノ利益モアルヲナレバ存生ノ間ハ衣食ニ差支ナシト雖モ或ハ死後ノ覺悟マデハ手ニ及バザル人モアラシ依之此度元金五百圓ヲ備ヘ毎年ノ利足ヲ以テ死亡ノ人ニ給スル議ヲ定メ其規則左ノ如シ

### 第一條

從來積金ノ内人頭税並無名積金ヲ以テ此元金ニ備フベシ但シ現今積高不足ナルガ故ニ保續積金ヨリ金百圓福澤氏ヨリ金百圓ヲ無利足ニテ借入定數ニ充タシメ年々ノ積金並ニ利足ヲ加エテ其高増加スルヲ俟テ其借入金ヲ償却スベシ

### 第二條

此元金ハ商社同ノモノナレバ入社金トシテ之ヲ用ヒ毎年其利益ヲ加ヘテ増加スベシ

### 第三條

社中死亡スル者ヘハ死後即時ニ金五拾圓ヲ與ヘテ病中死後ノ用ニ供ス可シ

### 第四條

死後ノ用ニ供ヘテ餘アラバ當人ノ遺言ニ從ヒテコレヲ處置スル歟又ハ遺言ナクバ最モ近キ親族ヘ渡ス可シ

### 第五條

目今此請合ノ高ヲ五十圓ト定メタレモ此後死亡ノ人少ナクシテ元金ハ次第ニ利倍増加スル時ハ再議シテ此高ヲ増ス可シ

### 第六條

脱社シテ他ノ事ヲ爲ス者ハハ請合ノ高ヲ與フルヲナシ但年  
老シテ隱居スルカ又ハ現ニ社ノ事ヲ辭スト雖凡他ノ商業ニ  
就カズシテ隨意ニ社ノ議ニ關スル者ハコノ請合ノ下ニ付キ  
社中ト視傲シテ定リノ高ヲ與フ可シ

### 第七條

此請合金ヲ受ル者ハ社中一同ナレ凡試中並ニ臨時雇ノ人ハ  
コレヲ除ク試濟ノ後一ケ年ヲ經テ評議ノ上第一類ニ入ルハ次條ノ如シ但シ入社退社其外ノ  
事故ニ由リコレヲ受ク可キ人ノ姓名ハ卷末ニ記シ置キ時々  
増減アルベシ

### 第八條

吾社中ニ來ルモノ商業稽古人中年或ハ小僧ノ類ハ試濟ノ上全一ケ年  
ヲ經テ始メテ死後請合金第一類ノ連名ニ入り金十圓ヲ與フ第一類  
全一ケ年ヲ經テ第二類ニ入り金二十圓ヲ與フ第二類全一ケ年ヲ經

三

四

テ第三類ニ入り働社中ト均シク金五拾圓ヲ與フ可シ

### 第九條

臨時雇ノ人ハ之ヲ除クノ法ナレ凡試濟ノ上全一ケ年ヲ經テ  
社中ノ入札ニ由テ此連名ニ入ル時ハ上件ノ法ノ如シ

### 第十條

働社中ノ評議ニ由テ新ニ働社中ニ加ハル人ハ入局後ノ日數  
ニ拘ハラズ働分合ノ多少ヲ問ハズ第三類ノ連名ニ加フベシ  
金五十圓ヲ與フ

### 第十一條

賄所奉公人並ニ荷造方等ハ入局ヨリ全三ケ年ヲ經テ始テ第  
一類連名ニ入ルヲ得ベシ但シ社中評議ノ上ニテ業務方ノ人  
員ニ加ハル時ハ其商業ニ入ルノ年ヲ以テ第一類連名ニ加ヘ  
次年ヨリ之ヲ倍ス一一般ノ例ノ如シ